

グループによる報告と相互討論を通して、新たな視界が開かれる

学校教育講座・渡邊弘純

1. 授業の位置と目標

この授業は、教育職員免許状に必要な必修科目の受講後、広い視野から、日本における人間形成の特質を捉えなおすことを意図して設けられた。教職科目 A、及び教育心理学専修コースの選択科目となっている。

人間は、それぞれの時代に、地域、国、宗教、人種、階層、社会的集団などの特定の文化のなかで、自己を形成していく。この人間形成と文化の関連を探究することが授業のテーマであり、本年の授業では、トピックとして、心理学分野で研究蓄積のなされている「達成動機」を取り上げた。

先進諸国において学習意欲の喪失が指摘されるようになって久しい。わが国においては、「格差社会」の進行とも関わって、学習意欲格差も議論されている。日本における人間形成の特質と関連させて、児童生徒の学習意欲の現在を明らかにした上で、学習意欲と密接に関連する心理学用語である「達成動機」に関わる内外の文献を共同で読み、討論を通じて、児童生徒への具体的援助の方向について提言できることを目標とした。

2. 授業の外形的展開

当初の3回は、授業者が、文献やレジュメや資料を提示し、解説を加える形で講義した。この間に、受講者のグループ作りを行い、各グループの課題（報告する文献）を選択し、報告のための準備を行った。選択の授業であるため、受講者が確定できず、また、多様な専修コースからの受講者が含まれていたため、グループ分けに苦慮した。

4回目から12回目までは、この分野の最先端の研究をまとめた論文を、受講者が報告して、討議していった。13回目から15回目までは、最新の研究ではあるが、読みやすい書物を報告した。

1コマの展開は、最初の30分が、担当グループによるレジュメによる内容の紹介・解説と討論課題の提示、次の30分が、担当グループの司会による討論課題についての全体討論、最後の30分が、授業者による用語の解説や疑問点の解明、及び討論のまとめ、という順序で進められた。そして、終了後に、意見・感想等の記入が行われた。

3. 受講者と授業への出席状況

授業の受講者は、教育心理学専修5名、国語教育専修4名、家政教育専修3名、社会科教育専修・聴覚言語コース各2名、その他の4専修・コース各1名、計20名であった。授業内容の理解の水準は多様であった。

出席状況は、かなり良好で、全部出席8名（40%）、1回欠席7名（35%）、2回欠席2名（10%）、3回以上欠席3名（15%）であった。

4. 学生による授業改善のためのアンケート結果

毎回、小さな紙片に授業への意見や感想や疑問点を書いてもらい、受講者と授業者の意思疎通を図ったほか、全ての授業終了後に、5件法（5. 強くそう思う、4. ややそう思う、3. どちらともいえない、2. あまりそう思わない、1. 全くそう思わない）による調査と自由記述による質問への回答を求めた。無記名であったため、17名の回答を得るに留まった。

（1）この授業に意欲的に取り組みましたか。

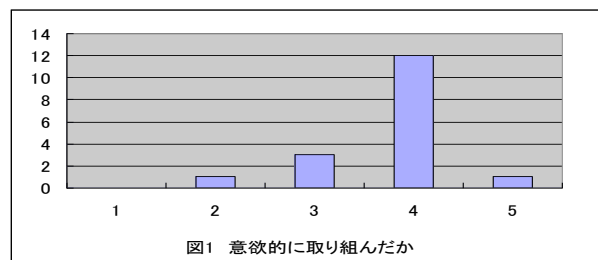


図1 意欲的に取り組んだか

図1に示すように、4が最も多く、比較的意欲的に取り組んでいることがわかる。

（2）テキストは適切でしたか。

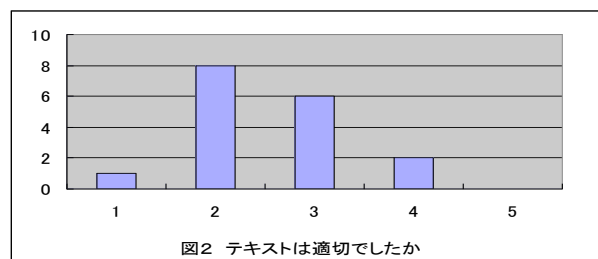


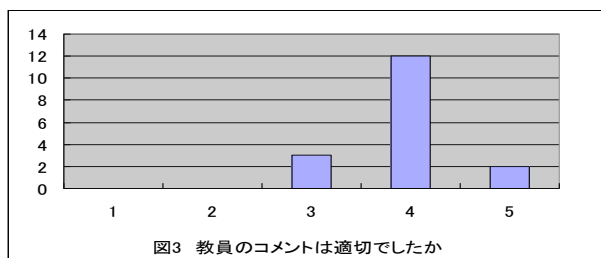
図2 テキストは適切でしたか

意図して最先端研究を取り上げたテキストを使用したため、多くの受講者が、2と3の回答を行っている。骨折りがない良いテキストだという反応を期待したが、無理であった。

(3) 授業の内容やレベルは、適切でしたか。

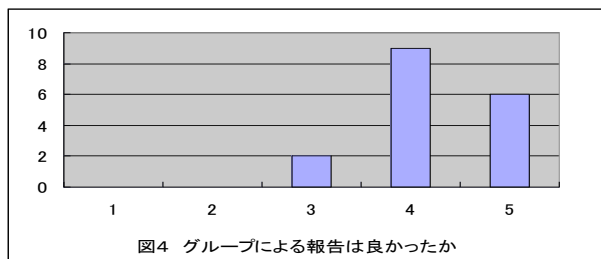
「授業の内容やレベルは、あなたにとって適切でしたか」に対する回答は、2が7名、3が6名、4が4名であった。計画的に非常に難しい文献を受講者にぶつけたので、予想通りの回答といえる。

(4) 教員のコメントは適切でしたか。



多くの受講者が4と回答しており、まずまずの回答であった。コメントの時間が十分に取れず、説明の中途半端さをも示していると解される。

(5) グループによる報告は良かったか。



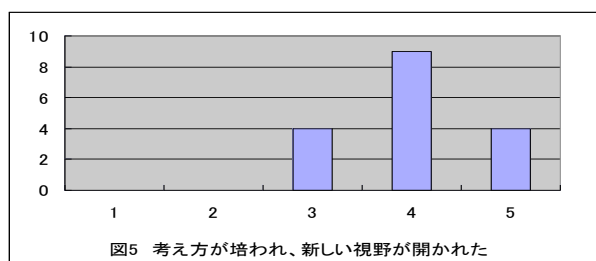
「順番に、グループごとに報告していくやり方は、良かったですか」への回答には、5も6名いた。困難な課題へグループで協力して取り組んだ達成感も含まれていると、授業者は考える。

(6) 報告者が司会する討論は適切でしたか。

「報告者の司会によって行った討論は、適切でしたか」への回答は、(5)と同様好評であり、5が6名、4が10名、3が1名であった。討論への主体的参加が、この結果をもたらしたと考える。

(7) この授業によって、自分の考え方がつちかわれたり、新しい視野が開かれたりしたところがありましたか。

授業全体を通してのねらいは、ここに置かれていた。図5に示されるように、一定の達成は示されたが、5の回答者が4名に留まり、3の回答者が4名あったということは、今後課題を残している。



5. 自由記述から読み取ることがきるもの

(1) グループによる発表が効果的であった。

「難しいテキストをグループのみんなで協力して読み切ったこと」が最も印象的であり、「説明が難しく、辞書を調べたり、みんなで検討したりしながらレジュメにまとめていった。一人ではできないことも、みんなで頑張ればできることを学んだ。」「グループで報告という授業形態はとても新鮮でした。」「ただ講義を聞くだけより、テキストを読む意欲も高かった。」「報告の機会を設けたことで、自分なりの考えをまとめたり、相手に伝わりやすいよう言葉を考えたり、人前で発表したりすることが出来て良かった。」などの記述が見られた。

(2) 討論で、受講者相互の意見交換が出来た。

良かったこととして、討論を挙げた者が多く、「討論の時間、自分にはない意見がきけたし、それぞれの課題で新しい発見があった。」「いろいろな意見が聞けて、認識が広がり、驚きがあった。」「たくさんの人と意見交換しながら、自分の考えや理解を深めることが出来た。」などと述べた。

(1)(2)は、いずれも、「学生主体の授業の展開」を評価するものであり、積極面として、「少人数で丸く輪になって授業を受けたこと」、「皆で一つのテーマについて、一緒になって学んでいくという姿勢で進んだ授業」などの指摘もあった。

(3) 授業者と受講者の意識のズレ文献の選択

授業者は、現在の最前線の研究に受講者を出会わせることを意図したが、受講者は、難解すぎると回答する者も多かった。「内容が難しすぎ、レジュメも難しかった。」「難しかった。」「もう少しやさしい文献を」などの回答が寄せられた。難しい用語解説を求める意見もあった。その一方で、子どもへの対処の具体例に時間を割くことを求める声も少なくなかった。「教師が子どもにどのような声かけや行動を取れば良いか」、「子どもに対する具体的な対応例を知りたかった。」「子どもにどう働きかけるか、実践例を。」などの回答が少なくなかった。

文献の選択は、今後の課題として残される。